

ジョージ・イーストマン・ハウス国際写真映画博物館・映画部のアーカイヴ事業

岡島 尚志
Hisashi Okajima

連載： フィルム・アーカイヴ の諸問題 第51回

本連載では、これまで世界のさまざまなフィルム・アーカイヴを取り上げ、その事業やコレクションを紹介してきたが、今回は、米東海岸のジョージ・イーストマン・ハウス国際写真映画博物館 (George Eastman House International Museum of Photography and Film) 映画部 (Motion Picture Department) について報告する。

東京国立近代美術館フィルムセンターとジョージ・イーストマン・ハウス映画部門との関係は古く、1976年に開催された上映企画「アメリカ映画の史的展望」、1993年の「知られざるアメリカ映画」では多くのプリント提供を受け、近年はFIAFを通じた情報交換、コレクションの相互貸出や複製交換なども行なっている。ニューヨーク近代美術館と並んで、フィルムセンターにとって常にもっとも親しい「アメリカの友人」であり続けている同アーカイヴについては、すでに、「海外における映像芸術とミ

ュージウム活動の研究」(1992年)と『『知られざるアメリカ映画』講演集」(1995年、共に東京国立近代美術館発行)に紹介記事と講演採録があり、「21世紀の芸術振興策を考える～芸術振興のための法と制度～／最終報告書・アメリカ、韓国の映画振興を中心に」(2003年、国際文化交流推進協会)にも報告が掲載されており、また、ジョージ・イーストマン・ハウスのホームページ (URL: www.eastman.org) にも情報がふんだんにあるが、以下は、同映画部のフィルム・アーカイヴとしての仕事に話題をしぼって、その詳細を述べる最新レポートである(筆者の調査訪問は今年の11月11日と12日)。(H0)

ジョージ・イーストマン・ハウス国際写真映画博物館 (GEH/IMPF) 映画部 (代表はシニア・キュレーターのパオロ・ケルキ・ウザイ) は、ニューヨーク州ロチェスター (住所: 900 East Avenue, Rochester, NY 14607) にあって、ワシントンDCの議会図書館 (LOC) 映画放送録音物部 (MBRS)、メリーランド州カレッジパークの国立公文書館 (NARA) アーカイヴズ²⁾、ニューヨーク近代美術館 (MOMA) 映画メディア部、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) 映画テレビ・アーカイヴ、カリフォルニア大学バークレー校 (UCB) ユニヴァーシティ・アート・ミュージアム／パシフィック・フィルム・アーカイヴ (UAM/PFA)、映画芸術科学アカデミー (AMPAS)／アカデミー・フィルム・アー

カイヴといったアメリカ合衆国の主要な公的フィルム・アーカイヴの一つである。FIAFには1949年に加盟している。

映画用ロール・フィルムの商品化をその主要な業績の一つとするイーストマン・コダック社の創業者ジョージ・イーストマン (1854～1932) が所有していた12.5エーカーに及ぶ私有地に、彼の居館と庭園を復元した上で1949年開館した写真と映画のための歴史博物館であるジョージ・イーストマン・ハウスは、そのミッションの中に映画の保存・公開等、アーカイヴ事業を含む公的機関である。同記念館³⁾には、保存棟、研究棟、展示施設、上映施設 (座席数534のドライデン・シアターと80のカーティス・シアター)、教育施設などが含まれている。

コレクション

1947年に映画フィルムと関連資料、歴史的機材等の収集事業が開始され、ジェームズ・カード、ジョージ・C・プラット、ヤン・クリストファー・ホラックら歴代のキュレーターたちの下で、世界に誇るべきユニークなコレクションが構築されてきた。

コレクションを、ホームページに公表された数字で見ると、以下の通りになる。

映画フィルム	25,000タイトル以上
スティール写真	5,000,000枚以上
映画用ポスター	約10,000枚

映画フィルムは最も古いもので1894年製。



ジョージ・イーストマン・ハウス



ルイ・B・メイヤー・コンサベーション・センター

伝統的に無声映画とナイトレート・フィルムの収集、保存、修復にもっとも力を入れており、国別では、デミル、インスをはじめアメリカ産に強いのは当然だが、英仏独露などの無声映画も多い。トーキーではMGM作品などが充実しており、特に多くのテクニカラーのオリジナル・プリプリント素材を保有しているのは貴重である。歴史的なアヴァン＝ギャルド映画（例えば、ジャン・エプスタンではなくジェームズ・シブリー・ワトソンによる「アッシャー家の末裔」[1928年]）やドキュメンタリー、インデペンデント映画、さらに9.5mm、17.5mm、28mm、60mm、65mmなど稀少フォーマット・フィルムも大量にあって、豊かなバラエティを誇っている（保存については後述）。

AMPAS、MOMA等と並んで全米有数の所蔵量を誇る映画宣伝用スティル写真は、現在、その内100万枚についてカタログギンギが終了した段階にある。そうした写真は、経年での反りや歪み等を避けるため、フェイス・トゥ・フェイス／バック・トゥ・バック式で保管、無酸紙に挟み無酸箱に収納している。デジタル化も高速スキャナーを使って同時進行中である。ポスターなど大版の紙資料は、革と無酸紙で挟んで保管している。なお、紙資料の保管環境は、見学時で72.1°F(22.3°C)、31%RHであった。

他にも映画前史素材、歴史的な撮影・映写機材、標準化されなかった稀少機器等の膨大なコレクションが倉庫を埋め尽くさんばかりに収蔵されている。

セイフティ・フィルムの保存

不燃性のセイフティ・フィルムはネガ、ポジにかかわらず、すべてイースト・アヴェニューの記念館内にある3つの保管庫に収納されている。11月訪問時の温湿度表示は、40.5°F(4.7°C)、33% RH、各保管庫の前室（“慣らし”[acclimatization]のための部屋）は、52°Fを示していた²。フィルムはコレクションごとにグループ分けされており、例えば「Cappaコレクション」などという名前が付いている（これはマーティン・スコセッシからの大量寄贈フィルム群で、彼の母方の家名に由来する命名である）。16mmフィルムはプラスチック容器（ポリプロピレン）、35mmフィルムは金属缶に収納している。大量のフィルムを抱えるアーカイヴにとってコンテナ（缶、収納容器）の経済的負担は無視できるほど軽いものではない。将来は、こうした館内での保管を止め、郊外に保存センターを新築してすべてをそこへ移転することを計画しているという。

高速巻き取り機、比較視聴機（コンパライズン・マシーン）といった基礎的なアーカイヴ機材についてはCTM製が多いが、KEM製、ステ

ーンベック製も使われている。また、デジタル修復用としては、Diamant/Davinciが新しく購入されていた（後述のアーキヴィスト養成プログラムでも使われているらしい）。

ナイトレート・フィルムの保存

映画文化の基本文化財とも言い得るナイトレート・フィルム・コレクションは、GEHから車で20分ほどのChili（チャイライと発音、インディアン語源、ロチェスター市と同様NY州モンロー郡に属する）の地に、保管されている。

4エーカーの土地に1995年設立された建物は平屋コンクリートで12の小部屋からなっている。一つのヴォールトには2,184缶が収蔵可能で、細かく仕切られた棚一つに2缶ずつ収納されていた（缶はポリプロピレン製）。所蔵量は1,000フィート巻で28,000リール——貴重なネガ、原版、テクニカラーのセパレーション等が多数あって、見るものを思わず緊張させてしまうほどである（見学時はスタッフがフレッド・アステアの“The Barkleys of Broadway”[1949年]の白黒セパレーション・ネガを検査中であつた）。

引火・発火の可能性を避けるため、すべての電気系統はヴォールトの外付けになっており、また、職員はもちろんすべての人に、入庫時はゴム製の靴底を持つ靴、またはシューカパーの着用を義務づけている。また、爪を短くすること、長髪を後束ねにすること、指輪を外すことなどの服務規程もある。ヴォールトの側壁は万一の時には“外に抜ける”ブローアップ＝ドア・タイプにし、また、床には、液剤などが溜まらないように、緩やかな傾斜を持たせるなど細やかな工夫もなされている。各ヴォールトは20分ごとに完全換気が行なわれ、空気清浄フィルターは1ヵ月に1回交換するタイプのものを使用している。庫内の温湿度はコンピュータによる集中管理システムで制御されており、11月12日訪問時の表示によれば、「平均庫内温度40.1°F(4.5°C)、同湿度31.4% RH、廊下（前室）部分温度44.4°F(6.9°C)、同湿度25.0% RH、外気温60.7°F(15.9°C)」であつた。

職員は常駐者1名で、その彼女が建物の管理、フィルムの点検、さらには見学ツアーまで行なう（ただし、職員の全体会合をかなり頻繁にここで行っている）。縮み検査も重要な仕事のうちだが、ここでは縮み測定にミュンヘンのHans Schneider cine-technik製を用いている（デジタル表示部品は日本のMitutoyo製）。ちなみにGEHでは縮みの映写不可ポイントを1.5%に設定していた。

不燃化コピーの作成後、ナイトレート・オリジナルの腐朽が復元不能の最終段階に達した時は、破棄の決定がなされる。プリント状態の

報告を受けて保存担当のアソシエート・キュレーターがこれを決断する。破棄が決まったフィルムは、2ヶ月間、決められた円筒の特製ドラム缶で水につけ、ニューヨーク州法に従って捨てることになる（他の州でもほぼ同様の手続きで破棄されている）。この破棄には特別の課金はされない。

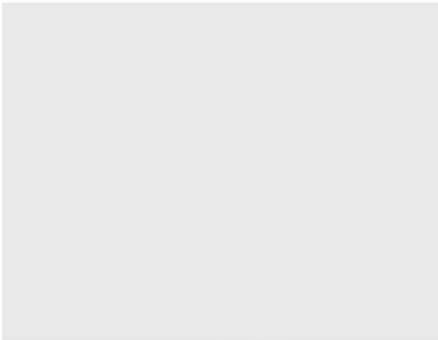
電力バックアップは停電後2分で移動、3日間運転可能。消火方法は水消火で、ヴォールトごとに行なわれるので“消火時の水によるフィルムへの被害の拡大”が起こらないようになっている。消防署は1マイル以内の距離にあり、また、当然、警備会社とも契約している。

建物の名称はルイ・B・メイヤー・コンサベーション・センター³であるが、“フィルム”という言葉が使われていない点が興味深い。周囲には何もないところとはいえ、近隣住民などに、可燃性フィルムを持っているということで過度に（あるいは不必要に）危険視されることを避けるため、敢えてFilmという言葉を使わないことにした、というのがその理由である。ただし、これには予期せぬ弊害もあるらしい——自然保護関係の施設と勘違いして、傷ついた動物の治療を求めてくる人もいるとのことである。

いずれにせよ、これは小規模ではあるが、世界最高のナイトレート保管庫の一つであると言って良いだろう。

目録化、情報化

目録作業のPCソフトウェア採用には、どのフィルム・アーカイヴも慎重であり、成功例、失敗例ともに耳にする。GEH映画部では「Museum」を使用していた。これはアメリカの美術館・博物館でよく使われているシステムで、割合最近になってこれに変更されたとのことであつた（MOMAの美術部門本体も一部使用。なお、他のFIAF加盟アーカイヴでは、最近、オーストラリア製のMAVIS[メイヴィス]の人氣も高い）。検索項目の語彙などに一部違和感はあるものの（例えば100年ほどしか歴史のない映画にはほとんど関係しない「王朝」などという項目がある）、プリント題名、再編集題名、シリーズ題名、短縮題名、海外版題名などタイトル関連項目が多い、同様に受領日、入庫日、正式入手日など複数の日付項目があるなど、フィルム・アーカイヴについての使い勝手はかなり良好に見える。カタログカーからの感想も「“curatorial remarks”という欄があり、ここに他でカバーできなかったことを自由に書き込むことができるのが気に入っている。インターコネクティブネスも良い」という、かなり満足度の高いものであつた。



スティル写真の保管



ポスターの保管



セーフティ・フィルムの保管室(内部)



ナイトレート・フィルムの保管室(前室)

事業資金と職員数

GEH映画部は、GEH自身の運営予算のほか、フィルム・アーカイヴや映画保存を支援する外部ソースとしては主に下記の4箇所から資金を得ている。

- ①連邦政府系機関：全米芸術基金 (NEA)、全米人文基金 (NEH)、アメリカ映画保存財団 (National Film Preservation Foundation)
- ②ニューヨーク州機関：ニューヨーク州芸術評議会 (NY State Council on the Arts)
- ③私立系機関：フィルム・ファウンデーション (マーティン・スコセッシらの設立による Film Foundation)
- ④個人・私企業の寄付者

スタッフ数は、常勤の専門職員が10名程度、これに加えて多くの非常勤職員がいる。1997年に最初の卒業生を送り出したL・ジェフリー・セルズニック映画保存スクールは、GEH内に設置されたフィルム・アーキヴィスト養成のための本格的な専門学校であるが、ここに在学中、または、卒業した学生なども雇用されている(このスタッフ規模には、GEHの各部門にまたがって仕事をするいわゆる総務・管理系職員の人数が含まれていない。フィルムや物品の受け取り等に関してその管理責任を担う登録管理員の職能はきわめて重要だが、これなどは総務・管理系のスタッフとしてカウントされている)。

“フィルム”アーカイヴとしての“進化”

このアーカイヴの他に比しての優位性として

記しておきたいのは、フィルム保存の科学や技術の面で産学双方から協力を得やすい立場にあるという点である。GEHとコダックとの歴史的な親近性もあって、コダック社のさまざまな写真・映画関係製品を安価に入手して使用していること、同じ地域にロチェスター工科大学 (RIT)があり、その中にある保存科学の専門研究機関イメージ・パーマネンス・インスティテュート (IPI)とも緊密な関係を築いていること、全米映画テレビ技術者協会 (SMPTE)とも長年にわたって協力関係にあること等は、レンズ、複写機、フィルムといった20世紀の先端産業発祥地の一つとして名を成したロチェスターにあるGEHならではの大きな利点であろう。

筆者が12年ぶりで再訪したGEHは、その間、着実にあげてきた保存・復元等の成果を控え目に見せてくれたが、一方で、むしろ何も変わらない“フィルム”・アーカイヴとしての姿こそを誇っているように思われた。

(主任研究官)

* My sincere gratitude should go to Paolo Cherchi Usai and all of his devoted staff members of the Film Department at the George Eastman House (H.O.).

註

- 1 NARAはNational Archives & Records Administrationの略だが、ここでは通例にしたがって国立公文書館と訳しておく。伝統的な公文書など紙資料を保管するのは、ワシントンDCの中心部にある本部建物。映画、ビデオなどを扱うのはそこから車で40分ほどのメリーランド州カレッジパークにある「スペシャル・メディア」部門 (Special Media Archives Services Division) で、建物は通常「アーカイヴズII」と呼ばれている。これとの比較でワシントン本部を「アーカイヴズI」と呼ぶ場合もある。なお、同館もその映画保存部門も現在、FIAF会員であることを中断しているが、再び、会員に復帰することが期待されている。
- 2 表示機器はIPI製のPreservation Environment Monitorで、これは摂氏華氏両表示が可能である。
- 3 日本では「ルイス」と表記することがあるが、正しくは「ルイ・B・メイヤー」。この大プロデューサーの名を關した映画文化関係の建物はアメリカの他のアーカイヴ等にもある。

fiaf

東京国立近代美術館フィルムセンターは、国際フィルム・アーカイヴ連盟 (FIAF) の正会員です。FIAFは文化遺産として、また、歴史資料としての映画フィルムを、破壊・散逸から救済し保存しようとする世界の諸機関を結びつけている国際団体です。

National Film Center (NFC) of The National Museum of Modern Art, Tokyo is a full member of the International Federation of Film Archives (FIAF). The Federation brings together institutions dedicated to the rescue and preservation of films, both as elements of cultural heritage and as historical documents.

東京国立近代美術館ホームページ
<http://www.momat.go.jp/>

お問い合わせハローダイヤル
 ☎03-5777-8600

「NFCニューズレター」第54号
 (2004年4月-5月号/隔月刊)

発行・著作:

独立行政法人 国立美術館/東京国立近代美術館◎編集:

東京国立近代美術館フィルムセンター
 〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6
 ☎03(3561)0823

制作:

印象社

発行日:

2004年4月1日

* 無断転載を禁じます。

NFC NEWSLETTER

Bimonthly

(Volume X No.1 April-May 2004)

Published and Copyrighted by

The National Museum of Modern Art, Tokyo ©
 (Independent Administrative Institution National Museum of Art)

Edited by

National Film Center

(The National Museum of Modern Art, Tokyo)

Addr.: 3-7-6 Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

Tel.: 03(3561)0823

Designed and Produced by

Insho-sha

Date of Publication:

April 1, 2004

* No part of this publication may be reproduced or reprinted without the approval of the publisher.